

- 渡辺 牧 1983 a 「家族成員の関係変容—シンボリック相互作用論の検討を媒介として—」『ソシオロゴス』7号。
- 渡辺 牧 1983 b 「社会的世界とコミュニケーション」(未発表)
- 渡辺 牧 1984 a 「翻身論序説—日本ファシズム期におけるあるジャーナリストの生き方の事例分析を中心に—」『ソシオロゴス』8号。
- 渡辺 牧 1984 b 第57回日本社会学会研究報告・会場配布資料。
- 山田英世 1966 『J. デューイー—人と思想』清水書院。
- 湯浅泰雄 1982 「精神医学と現象学的方法—深層心理学における他者理解のために」新田義弘他編『他者の現象学』北斗出版。

——文献挙示は〈ソシオロゴス方式〉による——

- Park, R.E. & Burgess, E.W. 1921b Introduction to the Science of Sociology, Univ. of Chicago Pr.
- Park, R.E. 1924 “The Significance of Social Research in Social Service” , Journal of Applied Sociology **Ⅷ** .
- Park, R.E., Burgess, E.W., Mckenzie, R.D., 1925 The City, Univ. of Chicago Pr. =1972 大道安次郎・倉田和四生共訳『都市—人間生態学とコミュニティ論』鹿島出版会。
- Park, R.E. 1929a “Sociology, Community and Society” , Gee, W. (ed.) Research in the Social Sciences, Macmillan Co.
- Park, R.E. 1929b “The City as a Social Laboratory” Smith, T.V. & White, L. (eds.) Chiago : An Experiment in Social Science Research, Univ. of Chicago Pr.
- Park, R.E. 1940 “News and the Human Interest Story” , Hughes, H.M. News and the Human Interest Story, Chicago Univ. Pr.
- Park, R.E. 1941 “Methods of Teaching : Impressions and a Verdict” , Social Forces 20.
- Park, R.E. 1950 “An Autobiographical Note” , Hughes, E.C. (ed.) Race and Culture, Free Pr.
- Park, R.E. 1973 “Life History” , Baker, P.J. “The Life Histories of W.I. Thomas and Robert E. Park” , AJS, (79- 2) .
- Plummer, K. 1983 Documents of Life-An Introduction to the Problems and Literature of a Humanistic Method, George Allen & Unwin.
- Rauschenbush, W. 1979 Robert E. Park : Biography of a Sociologist, Duke Univ. Pr.
- 斎藤茂男 1981『事実が私を鍛える—いまジャーナリストであること』太郎次郎社。
- Schwendinger, H. & Schwendinger, J.R. 1974 The Sociologists of the Chair, Basic Books.
- 清水知久 1969「アメリカ帝国主義の形成」『講座世界歴史22』岩波書店。
- 進藤久美子 1982「南北戦争と革新主義」三宅一郎他編『アメリカのデモクラシー—その栄光と苦悶』有斐閣。
- 志邨晃佑 1982「革新主義的統合」関西アメリカ史研究会編著『アメリカの歴史(下)—統合を求めて』柳原書店。
- Small, A.W. & Vincent, G.E. 1894 An Introduction to the Science of Sociology, American Book Co.
- Small, A.W. 1907 Adam Smith and Modern Sociology, Univ. of Chicago Pr.
- 渡辺 牧 1977 「言論の可能性」『新批評』4号。
- 渡辺 牧 1979「近代イギリス・ジャーナリズムの発展過程—『知識に対する課税』の機能転換を中心に—」『新聞学評論』28号 日本新聞学会。
- 渡辺 牧 1980 a 「ニュー・ジャーナリズム精神」『文化通信』2403号 文化通信社日本マスコミセンター研究所。
- 渡辺 牧 1980 b 「R. E. パークに学ぶ」『文化通信』2407号。
- 渡辺 牧 1981「地域的情報メディアの実態と問題—新聞メディア(1)松本・岡谷・諏訪地域の地域紙①歴史1)戦前・2)戦後」東京大学新聞研究所編『地域的情報メディアの実態』東京大学出版会。
- 渡辺 牧 1982「志向性の社会学序説—ある編集者の生き方をめぐって—」『ソシオロギス』6号 ソシオロギス編集委員会。

- Faris, R.E. 1967 Chicago Sociology : 1920-1932, Chandler.
- Filler, L. 1939 Crusaders for American Liberalism : The Story of the Muckrakers, Collier Book Edition.
- Fisher, B. & Strauss, A. 1978 "The Chicago Tradition and Social Change : Thomas, Park and Their Successors", Symbolic Interaction, (1 - 2)
- 藤田弘夫 1984 「1920年代のアメリカ社会学の動向」『日本社会学史学会年報』6号。
- Hinkle, R.C. 1980 Founding Theory of American Sociology : 1883-1915, Routedledge & Kegan Paul.
- Hughes, E.C. 1971 The Sociological Eye, Aldine-Atherton.
- Hughes, H.M. 1968 "Robert E. Park", Sills, D.L. (ed.) International Encyclopedia of the Social Sciences, Macmillan and Free Pr.
- Hughes, H.M. 1980 "Robert Erza Park : The Philosopher-Newspaperman-Sociologist", Merton, R. & Riley, M.W. (ed.) Sociological Traditions from Generation to Generation : Glimpses of the American Experience, Ablex.
- Hughes, H.S. 1958 Consciousness and Society : The Reconstruction of European Social Thought 1890-1930=1970 生松敬三・荒川幾男訳『意識と社会』みすず書房。
- 岩野一郎 1982 「都市政治と移民」阿部齐他編『世紀転換期のアメリカ—伝統と革新』東京大学出版会。
- James, W. 1899 "On a Certain Blindness in Human Beings", Talks to Teachers on Psychology and to Students on some of Life's Ideas =1960 大坪重明訳、「人間における或る盲目性について」『ウイリアム・ジェイムズ著作集1』白水社。
- 香内三郎 1980 「報道形態の変化と調査報道」『新聞研究』3月号。
- Kuklick, H. 1980 "Chicago Sociology and Urban Planning-Sociological Theory as Occupational Ideology", Theory and Society, (9 - 6)
- Lofland, J. 1976 Doing Social Life : The Qualitative Study of Human Interaction in Natural Settings, A Wiley-Interscience.
- Madge, J. 1962 The Origins of Scientific Sociology, Free Pr.
- Matthews, F.H. 1977 Quest for an American Sociology : Robert E. Park and the Chicago School, McGill-Queens' Univ. Pr.
- Mckinney, J.C. 1966 Constructive Typology and Social Theory, Appleton-Century-Crofts.
- 水野節夫 1979 「初期トーマスの基本的視座—『ポーランド農民』論ノート(1)—」『社会労働研究』(25-3・4)。
- 水野節夫 1983 「エリザベート・フォン・Rの症例の分析」(未発表)。
- 中西弘二 1972 「アメリカ資本主義の確立と独占への道」鈴木圭介編『アメリカ経済史』東京大学出版会。
- 中野 卓 1984 「生活史研究について」川添登編『生活学へのアプローチ』ドメス出版。
- 折原 浩 1969 「マージナル・マン—その立場と可能性をめぐるノート—」『危機における人間と学問—マージナル・マンの理論とウェーバー像の変貌』未来社。
- Payne, G. et al. 1981 Sociology and Social Research, Routedledge & Kegan Paul.
- Park, R.E. 1921a "Sociology and the Social Sciences", AJS 26, 27.

パークは、コミュニケーションの最大の障壁は、人種、民族の差異にある、と考えていた。Fisher & Strauss [1978: 8] 参照。

(38)この時期、社会学が、社会改革への関心によって動機付けられたのは、歴史的趨勢と言えよう。黎明期の社会学者たちは、聖職者の子弟などが多かった。Coser [1978] 参照。

(39)産業化の進行下、シカゴは20世紀初め、一貫して危機的状況であった。社会学者たちは、社会解体と、危機克服のための合理的方策に注目していた。後者のモデルは、農村生活を感傷化するものでも、社会統御の伝統的形式の復活を正当化するものでもなかった。Schwendinger & Schwendinger [1974: 247-249] 参照。

(40)本稿で呈示した初期パークの生活史と初期シカゴ学派の特質、問題点、諸仮説は、中期、後期のパーク、同学派の他の多くの社会学徒の生き方、調査モノグラフの検討などを通じて、さらに掘り下げた研究を必要としている。本稿は、これらに段階的接近を図る基礎的作業の一環となろう。

文献

有末賢 1984 「現代社会と社会学的想像力」『三色旗』7月号 慶応義塾大学通信教育部。

Barnes, H.E. 1948 “Albion Woodbury Small : Promoter of American Sociology and Expositor of Social Interests”, Barnes, H.E. (ed.) An Introduction to the History of Sociology, Univ. of Chicago Pr.

Berger, P.L. 1963 Invitation to Sociology. =1979 水野節夫・村山研一訳『社会学への招待』思索社。

Bogue, D.J. 1959 The Population of the United States, Free Pr.

Boran, B. 1947 “Sociology in Retrospect” AJS, Vol. 52.

Branmson, L. 1961 The Political Context of Sociology, Princeton Univ. Pr.

Bulmer, M. 1984 The Chicago School of Sociology—Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research, Univ. of Chicago Pr.

Burgess, R.G. 1982 “Approaches to Field Research”, Burgess, R.G. (ed.) Field Research : A Sourcebook and Field Manual, George Allen & Unwin Ltd.

Carey, J.T. 1975 Sociology and Public Affairs : The Chicago School, Sage Publications.

Coser, L.A. 1956 The Functions of Social Conflict, Free Pr.

Coser, L.A. 1978 “American Trends”, Bottomore, T. & Nisbet, R. (ed.) A History of Sociological Analysis, Basic Books.

Deleuze, G. & Guattari, F. 1980 Mille Plateaux, Les Editions de Minuit.

Dibble, V.L. 1975 The Legacy of Albion Small, Chicago Univ. Pr.

Dykhuizen, G. 1962 “John Dewey and the University of Michigan”, Journal of the History of Ideas, (23 - 4)

Easthope, G. 1974 History of Social Research Methods, Longman Group Ltd. =1982 川合隆男・霜野寿亮監訳『社会調査方法史』慶応通信。

江原由美子 1978 「生きられる世界の理論化をめざして」『ソシオロギス』2号 東京大学大学院社会学研究科ソシオロギス編集委員会。

江原由美子 1983 「行為と文脈—『リアリティ構成』論ノート」『ソシオロギス』7号。

- (24)パークが、人生の初期の知的開眼において、哲学の洗礼を受けたことは、後に、W. ジェームズ、G. ジンメル、W. ヴィンデルバントらの哲学的思索に立脚した研究から大きな影響を受ける伏線であったと言えるよう。
- (25)Matthews [1977 : 31] は、新聞記者から研究生活への転換を、パークの生涯を貫く「探究心の弁証法的パターン」というキー・ワードで表現している。
- (26)この分節化は、1920年代以降、シカゴ大学での統計的一般化と事例研究に関する継続的論争の背景となった。Plummer [1983 : 52-53] 参照。
- (27)ヴィンデルバントと当時のドイツの知的運動については、Hughes [1958→1970] 参照。
- (28)パークは、事実を相対主義的に捉え、「諸事実は、結局、想話の宇宙内でのみ事実であり、すべての公衆がそれを有する」(Park[1940]) と考えていた。
- (29)ファウストからの影響については、誇張されたものとは言い難い面がある。パークは、原語で読み、その文学世界に魅せられていた。Park [1941 : 37], Raushenbush [1979 : 12] 参照。
- (30)Raushenbush [1979] による伝記には、パークの妻が、変転めまぐるしい夫の生き方に、決して楽ではなかったが、何とかついていった過程が記述されている。パークには、妻の人生を少なからず犠牲にして自己実現に向かった、男性中心主義の負の生活史的過程がうかがわれる。
- (31)ジェームズは、我々が、自己の実際的関心に妨げられ、自分以外の事物に対し、盲目、無関心に陥るということを主張している。James[1899→1960]参照。
- (32)新聞記者の時、パークが歩いた都市のサブ・コミュニティは、後に、パークが、自然的地域 (natural area) として概念構成したマテリアルに他ならない。「自然的地域は計画されたというより、生態学的過程に起因するが故に自然的」「多くの近隣と機能的エリアを伴う都市の社会的物理的構造は、集合的に共に暮そうとする人たちの予期しない帰結である」(Park[1929 a])。
- (33)P.L. バーガーは、世界市民主義 (cosmopolitanism) の具体的イメージとして、「世界中を自由に徘徊する者」をあげ、「社会学者が専門化に安住してしまうならば、社会学的冒険にとっては常に危険信号だ」と述べている。Berger [1963→1979 : 79] 参照。
- (34)初期シカゴ学派は、民俗誌的研究 (ethnographic studies) による文化人類学と深く接続している。パークの義息でシカゴ大学人類学部長を務めた R. レッドウィールド (R. Redfield) の一連のメキシコのコミュニティ研究は、パークの社会学を反映している。前者の『ユカタン半島の民俗文化』(The Folk Culture of Yucatan[1941]) は、パークに献げられた。パークは、文化人類学の視点を導入し、教え子に、コミュニティを全体として (a community as a whole) 捉えることを勧めた。
- (35)「すべてを知ること、すべてを赦す」が、パークの好んで引いた金言だった。Fisher & Strauss[1978 : 9]参照。
- (36)パークは、ジェームズから、人々が伝統的生活から離脱する時にのみ、内的意味で「よそ者」(stranger) に出会い始めるということを学んだ。伝統からの解放、社会移動の促進は、個人主義的行為を可能にすると同時に、慣習的倫理の終焉と、競争の増大を伴う。さらに、パークは、もし人々が仮面の背後を理解すれば、自然な共感が湧きあがるだろうと、実体的視点を突破する発想を抱いていた。Fisher & Strauss [1978 : 8] 参照。
- (37)パークは、J. デューイから、「コミュニケーションとしての社会」という捉え方を、若き日に学んだ。

- 集合行動論、④ニュースとヒューマン・インタレスト問題、⑤人種関係論、⑥家族社会学、⑦犯罪社会学、⑧生活史研究、⑨量的社会調査を含む調査方法論研究、など多様な展開が可能である。
- (9)社会学的想像力の今日的意味に関しては、有末〔1984：2－6〕参照。
- (10)Plummer〔1983：52〕は、シンボリック相互作用論の源泉として、プラグマティズム、穩健アナーキズム・ロマン主義をあげている。さらに、抽象化、実体化、絶対化を嫌悪した思想的基盤は、1920年代、シカゴで形成されたと解釈している。
- (11)この系譜には、J. デューイ、パーク、H. ブルーマーらが属し、人々の経験と、社会生活の自由（open-ended）な創発的過程を重視した。Lofland〔1976〕参照。
- (12)現代のジャーナリズム研究に関する筆者の仕事としては、例えば渡辺〔1977〕、〔1979〕、〔1980 a〕、〔1981〕などを参照。
- (13)〈遍歴〉を、職業遍歴、地理的移動などの、外界への適応をめざした〈現実的遍歴〉と、自己実現をめざす〈内面的＝実存的次元での遍歴〉とに分節化すると、筆者の基本的関心は、後者を出発点としつつ、それと前者との相関関係にある。
- (14)社会学的知には、純粋な知的好奇心としての知、人間形成のための教養知、科学技術と接続する技術知、生き方を問う解放知、政策科学的発想と接続する統御知などの多様なベクトルが交錯していよう。
- (15)社会的関心が一枚岩を意味するのではなく、それ自体が多様であることが、今日の自由主義社会の特質であるとするならば、個人的関心は、社会研究の基礎的土壌を意味していよう。
- (16)「重要な他者」および準拠関係性に関しては、渡辺〔1982：74－85〕、〔1984 a：64－77〕参照。
- (17)その意味から、シカゴ学派の社会学史における位置付け、評価、今日的視点からの摂取をめぐっては、長い歳月を要するであろう精密な研究を必要としている。
- (18)例えば、B. Boran〔1947：312〕は、マルクス主義的視座から、パークらが階級闘争への関心が稀薄で、内集団、外集団（in-groups, out-groups）などを重視しすぎた、と批判する。これに対し、L.A. Coser〔1956：19－20〕は、パークが闘争（conflict）を社会学的发想の中核にしたと評価している。この二人の解釈について、L. Brannson は、パークのような独創的で複雑な思想家を、ヨーロッパのカテゴリーで解釈することの難かしさを示している、と指摘している。Brannson〔1961〕参照。
- (19)〈知〉を絶対視するのではなく、虚無的にみるのではなく、常に醒めたまなざしから相対視したうえで、なお「知は力なり」（“Knowledge is power”）という地点に到達するためには、いかにあるべきか、という問題関心からの問いである。
- (20)研究への専心生活から、別の新たな世界での生活経験を重ね、再び大学の研究生活に戻るといふ、ダイナミズムに富む事例として、中、後期の生活史は注目されよう。
- (21)この文献は、1927年、L. バーナードの調査に応じて、W.I. トーマスとパークが提出した生活史記録を、半世紀近く後に発表したものである。
- (22)大学総長、J.B. エンゼルは、真に民主的雰囲気や学園に盛りあげ、自由と責任を強調していた。山田〔1966：60〕参照。
- (23)デューイは、大学入学以前のもっとも重要な教育は、教室の外で、自然と直結する生産と生活を体験する中で得た。彼は、少年期の経験を、後に、学校教育論に結晶していく。彼の大学入学以前の生活史は、野に遊んだパークと類似性がみられる。山田〔1966：30〕参照。

20世紀初めのシカゴは、多様で可變的で、ダイナミックなエネルギーにあふれた産業都市だった。企業家精神に富む産業、金融資本家と有能な実務スタッフ、彼らと緊張関係に立つ労働運動家、社会主義者、大量の移民。ビジネス・チャンスをおねらう経済人から、繁栄の上澄みにありつこうとするマフィア、娼婦まで、多様な人間群像を呑みこみ、包みこんだシカゴは、良くも悪しくも現代的都市だった（Bulmer〔1984：12-27〕、藤田〔1984：14-29〕）。伝統に根ざす農村コミュニティが、共同体特有の時系列レベルの連続性、情緒レベルでの同一性を特質としているとすれば、シカゴは、人間が社会に働きかける創発性、可變性に富んでいた。他方では、激しい社会的競争に付随する、現代固有の社会的矛盾が噴出した都市であった⁽³⁹⁾。こうした状況の中、シカゴ大学で、パークは学生に、俗物(snob)、知識人ぶる人間(highbrow)の轍を踏まない、真の学徒としての生き方を身をもって示唆し続けた（Hughes〔1980：77〕、Kuklick〔1980：821-829〕）。また、パークは、常民(the common man)に深い敬意を抱き、人々の日々の生きられた経験(lived experience)から常に学ぼうとしていた（Matthews〔1977：17〕）。

パークが愛したのは、〈生〉における喜びや哀しみに根ざす“土の如き泥くささ”（“earthiness”）であり、嫌ったのは人間の偽善だった（Raushenbush〔1979〕）。彼が、W. ジェームズから重要な影響を受けつつ、社会学的調査研究の課題として、理性知の域よりも深層をめざし、共感(compassion)と知の相互関係性を重視した背景には、彷徨の旅を続けた、パークという人間の内的生活史が介在していたのである。⁽⁴⁰⁾

注

- (1)初期トーマスに関しては水野〔1979〕参照。
- (2)シカゴ大学社会学部では、当初から、都市を理論検証の最良の場と捉えていた。スモールは、都市化の急速に進むシカゴを「広大な社会学的実験室」と位置付けていた。Dibble〔1975：20-22〕参照。
- (3)アメリカ社会学史の年代区分に関しては、諸説呈示されている。例えば、L. Brannson〔1961：90〕は、パークの著名な論文「都市」〔〔1915〕〕の刊行、あるいは第一次世界大戦の終戦と共に、第一期は幕を閉じたと解釈している。本稿では、さしあたり、R.C. Hinkle〔1980〕の説に準拠する。
- (4)第一世代の進歩への楽観主義は、第二世代に入ると、W.I. トーマスの犯罪、飲酒行動、スラムなどへの関心、パークの黒人の社会運動への参加にみられるように、社会改革への関心に代替された。パークらは、アメリカの社会解体现象に焦点を向けたのである。Brannson〔1961：90〕参照。
- (5)初期シカゴ学派から触発されなかった社会学の研究は当時なかったとさえ言われている。第二世代は、社会学研究の方法論の価値転換を進めたのである。Brannson〔1961〕参照。
- (6)パークの質的調査法への関心とその背景は、文学、哲学から派生した人間的性質、行為の問題、新聞記者としての生々しい原体験、さらに、C. ブースの社会踏査によるロンドンの貧困研究（1892-97年刊行）、F. ボアズ、H. ローウィら人類学者の北米インディアン研究、B.K. マリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』〔〔1922〕〕、W.I. トーマスと F. ズナニエッキの共著『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』〔〔1918〕〕からの摂取などと多彩である。Park〔1925〕〔1929 b〕、Easthope〔1974→1982〕参照。
- (7)内的生き方に関しては、水野〔1983〕参照。
- (8)同学派からの今日的摂取をめぐっては、領域別に分節化すると、①都市社会学、②とくに人間生態学、③

したい。彼にとり、社会学の問題点は、その科学性ではなく、「いかに社会学を行うべきか」であったという解釈も提起されている (Fisher & Strauss[1978:11])。この問題解明のためには、W. ジェームズからの深い内的影響が切り口となるだろう。ジェームズは、人間が社会で役割演技する中で、不可避的に身にまとう仮面の背後 (behind the mask) の理解なしに、他者理解は不可能であることを主張した (James[1899→1960])。ジェームズの言う他者理解とは、近代が産出した理性知による理解可能レベルよりもはるかに深層を企図している。それは、感性知、理性知双方を包摂した、血の通った他者理解への志向であり、他者を鏡とした自己の発見をめざしている⁽³⁵⁾。パークは、彼から、仮面の背後に潜在する、個人の主観的固有性と〈生〉への情熱を想像し、洞察することによって、人々の多様な内的世界への理解が促されることを学んだ。論文「人間における或る盲目性について」は、パークの社会学における術学的抽象化への嫌悪を補強する役割を果たした。ジェームズはまた、真の理解とは、他者の生活への想像的参加 (imaginative participation) を要件とすること、即ち、洞察は、観察と同様に、感情移入 (empathy) を要件とすることを、パークに示唆したのである (Matthews[1977:32-33])⁽³⁶⁾。

以上を概括すると、現実の世界に分け入って直接観察を続ける作業は、そのことが社会に視野を開く原点だという意味で、「〈原〉社会学」、想像的参加による他者理解は、心に映った社会が、社会の一深層だという意味で、「〈深層〉社会学」の営みとして分節化できよう。パークは、科学としての社会学を重視したが、彼の科学主義は、〈原〉社会学と〈深層〉社会学の広い文脈から相対化される必要があると思われる。ここで、パークの社会学への基本的発想は、「〈原〉社会学」および「〈深層〉社会学」の位相から出発し、理論枠組形成のため科学的方法を重視したのではないかという仮説を呈示したい。パークの現代的意義の一つは、多くの実証主義的社会学が科学研究の出発点として措定する地点よりもはるか以前の、素朴な生活世界の直接観察にまで遡行し、同時に、人間の実体化された役割関係の背後までをみようとするまなざしの深さにあるのではないか。前者は、社会学を生活の世界に開いてゆくため、後者は内的生き方論、コミュニケーション論⁽³⁷⁾などへ接続している。

X 結 語

犯罪者、渡り労働者 (hobos)、黒人、アジアなどからの移民の群れ、スラム街の貧しき人々、新聞の人間の興味をそそるゴシップ記事——パークが、多様な志向をもつ研究パートナーたちと共に切りこもうとしたのは、無名の人々の生きる生活世界だった。初期シカゴ学派は、都市に巣食う犯罪者、娼婦、けちなギャングラーたちの暮す「地下世界」(underground-world) に対し、敗残者 (under-dog) のまなざしを理解しようと努めながら調査研究を進めた。

この学派を担った人々は、アメリカ社会学が黎明期だったことを背景に、根っからの社会学プロパーだけでなく、哲学、宗教、経済学など、異領域出身者が多かった⁽³⁸⁾。知的継歴だけではない。自ら渡り労働者の原体験を武器に、その研究に切りこんだ N. アンダーソン (N. Anderson) のように、実社会での生活経験を、研究に最大限生かそうと志向する人々がいた。パークもその一人であった。

Ⅸ 直接観察(〈原〉社会学)、想像的参加(〈深層〉社会学)からの出発——パークの社会学的発想をめぐる一つの仮説——

ここでは、パークの社会学的発想の固有性に関し、初期生活史を射程にいれ検討する。パークは、実際の調査研究を通じて、生きた社会に視野を切り拓くことを強く提唱した。彼が教え子たちに、〈現実〉に相まみえることの大切さを示唆していたことは、古くて新しい社会学的教訓と言えるだろう。H. ベッカー (H. Becker) は、1920年代にシカゴ大学で、パークから「君の手を現実の調査で汚しなさい」(“getting your hands dirty in real research”) と指導された。パークは、何よりも、自分の足と眼で現場に分け入る直接観察 (first-hand obserbation) を重視し、教え子に次のように語った。「豪華なホテルのラウンジ、ドヤ (flophouses) の戸口の上り段に行き、坐ってみなさい。ゴールド・コースト (Gold Coast) のベンチに、スラムの寝床 (slum shakedown) に坐ってみなさい。(中略) 要するに、紳士諸君、君たちのズボンのお尻を調査で汚してみなさい」(Mckinney[1966:71])。

現実の調査活動は、パークの考えによれば、観察に立脚したものであった。社会調査研究のための「実験室としての都市」(the city as a laboratory) として位置付けられたシカゴを歩き回り、群集の生態を凝視し、都市に生きる人々の声に耳を傾ける。パークにとり、社会学は、大学においてと同様に、街頭で容易に営みうる活動であり、双方が社会調査の中核であった (Burgess[1982:6])⁽³⁴⁾。一方、初期シカゴ学派は、1921年の『社会学という科学入門』などの著作を通じ、人間的性質 (human nature)、社会集団、社会統御 (social control)、社会的相互作用などに関する科学的定式化をめざした。定式化には両義性が伴う。それにより、混沌とした社会事象の動因、深層の分析、未来への予測が視えてくる可能性と同時に、具体的リアリティーが犠牲にされる危険性が生ずる。パークの内部で、この問題がどのように位置付けられていたかは今後の重要課題だが、彼は、現場のフィールドに分け入りながら、社会学的定式化をめざすことを提唱している。パークは、具体的リアリティーを尊重していたのである。例えば、1920年代から30年代にかけ、Local Research Fellows に参加した社会学徒たちは、週のうち、火曜から金曜までは大学で講義に参加し、土、日曜に調査に出かけ、フィールド・ノートへの記録作業を積み重ねていった (Hughes[1980:76])。

パークは、因襲を尊ぶ者とは対極的な、進取の気性に富む社会学者だった。彼が多くを学んだ W.I. トーマスのように、パークは、知的境界をこえて異領域からの積極的摂取を進めた。彼が科学的定式化のために努力した姿について、ヒューズは次のように回想している。「教室は懐胎の劇場 (the theater of gestation) となった。諸概念が援用、分析、応用され、徹底的に比較された。パーク博士は、テリア犬がスリッパを何度も押したり引いたりするように、抽象化、諸理論、諸事例と格闘した」(Hughes[1980:72])。

パークはシカゴ大学で、社会改良運動、社会福祉の実践活動とは明確に一線を画した形で、科学としての社会学の構築に向かった。しかし、筆者は、この科学主義は、パークの一つの貌とも言うべきものであり、彼の内部には多様な志向性が存在していたのではないかという解釈を呈示

は輝くような研究の産出を期待したが、恐ろしく失望し、勇気を挫かれた」(Park〔1973：257〕)。妻と三人の子を伴っての4年間の滞独生活(ドイツで、第4子が生まれている)、2年間の哲学助手の生活の結果は、この時点では失意極まりないものとなった。⁽³⁰⁾ 記者の仕事に深い愛着を抱きつつも、その中途から失意に陥り、30歳代で転身した学問の道にも、40歳代に入ろうとする中で、パークは一度は、したたかな挫折感を味わった。初期生活史にみる彼の内的生き方は決して平坦ではない。

パークは、外的諸条件との関わりの中で、自己の学問的アイデンティティを問い続けた。その問いは、多くの人々とは逆に、人生の後期に入って、青年学徒の心のように苛烈に燃えたぎった観さえる。パークのシカゴ大学の教え子で、彼の「新聞とヒューマン・インタレスト」への問題関心を継承したH.M. ヒューズは、次のように言う。「記者たちは、ヒューマン・インタレストと地域色ある記事の出稿を要請された。かくして、パークは不断に、ニュースとフィーチャー・ストーリーをあさった。生涯を通じ、彼にとって、都市は、人間的性質を発見するための実験室となった」(Hughes〔1968：416〕)。

一方、パークは1898年に入学したハーバード大学大学院で、W. ジェームズの論文「人間における或る盲目性について」から深く触発され、⁽³¹⁾ 生活を退屈にも、あるいは熱情あふれる営みともする“個人的秘密”(“personal secret”)を探索対象とするに到った。この点について、ヒューズは次のように述べる。「パークは、“秘密”を探究した；彼は、自己の知的生活を、社会生活の諸リアリティーへの専心と、社会的諸類型と諸過程をあらゆる場での人間集団に適用可能な用語で記述する仕事への専心との交互の営みとして解釈した」(同上)。

多様で具体的な社会的リアリティーへの強烈な関心と、社会科学的定式化への志向。ヒューズが概括しているように、パークは、前半生を、大学と大学の外とを往来しながら、幅広い原体験を重ねた。パークは胸襟を開きながら学問的アイデンティティを求め続け、その中から、都市、人種関係、新聞、犯罪研究などに関する社会学的発想を紡ぎ出していった。⁽³²⁾ 彼の初期内的生活史の主調低音に耳を傾けるならば、パークは、実社会の荒波に翻弄されながら、自分が自分らしく生きていくための視座形成に向けて内的旅を続けた彷徨者ではなかったか、という仮定を呈示しよう。初期生活史にみる彼を彷徨者として捉え直す時、視点設定によっては、生涯の研究課題が絞り切れず、足踏みの多い拡散的な前半生であったとも言えよう。だが、はたして、そのように一義的に解釈することは妥当か。

学徒としての夢を抱きつつも、前半生を研究に専心できなかったパークは、研究以外の夾雑物を身に負った。だが、逆説的だが、パークは、その夾雑物こそ、社会研究の源泉であることを意識化していた。彼は、実社会での豊かな生きられた経験を、社会学の感性知、理性知の営みの世界に最大限生かそうと、後年、力を尽したのではなかったか。彷徨者としてのパークの生き方は両義的だと思われる。生涯の自己本来の目標をめぐる壁に突きあたる姿と、もう一つは内的苦悩から逃避せず、迂回路を歩みながら、視点更新に努め、目標実現に努力する姿が重層的にみられる。だからこそ、「パークは、科学的関心を、単一の方法で対応可能な諸問題に限定することを拒絶した」(Hughes〔1968：419〕)と指摘されるように、開かれた自由な社会学的発想を尊重したのではあるまいか。⁽³³⁾

南北戦争は、アメリカの工業拡大のきっかけとなった。19世紀後半、工業資本家層を支持基盤とした共和党政府は、労働者保護や、企業独占の統御に積極的でなかった。このため、産業における弱肉強食的な独占、分配の不均衡による貧富格差の増大、労働者の低賃金、重労働、失業などの社会問題が増大した（進藤〔1982：14-31〕・中西〔1972：391-462〕）。分裂気味の社会に、新たな統合の政策的枠組を与えたのが、1893-1897年の恐慌期から第一次世界大戦に至る、いわゆる革新主義時代の少年、女性労働者保護などの諸改革である。（志邨〔1982：13-28〕）。国際関係では、1898年の米西戦争を契機に海外膨張計画が具体化され、いわゆる帝国主義段階の進行と国内での革新主義とが同居した時代として、20世紀初葉は位置付けられよう（清水〔1969：247-289〕）。こうした状況の中、世紀初めの10年間、都市文学者を中心にリアリズム文学が開花し、さらにジャーナリズムでは、社会悪の暴露と告発をねらったマックレーカーズ（muckrakers）が出現した（Filler〔1939〕）。

Ⅷ 彷徨者としてのパーク——初期パークの内的生き方の検討——

次に初期パークの内的生き方に関する検討を行う。J. マッジは、パークについて「生涯を通して、彼はジャーナリストであり、街路と出遇いの場のありふれた行動とできごとの中に、常にヒューマン・インタレストを見い出そうとした人間であった」と述べている（Madge〔1962：88〕）。パークは、みずみずしいヒューマン・インタレストを抱き続け、社会学研究との接続を企図した。その点、学史の因果関係レベルでみる限り、初期シカゴ学派の学際研究重視は、若き日からのパークの志向と接続している（Bulmer〔1984：190-207〕）。だが、結果から過去の諸相を裁断する素朴実体論的視点から、パークと同学派を捉えることは、多くの重要な側面を見落とすことになるのではないか。

確かに、パークは青年期の原体験を踏まえ、あるいは内的に回帰しつつ、ジャーナリストとしての発想を社会的発想にくりこもうとした。⁽²⁸⁾しかし、パークのこうした姿勢、多様な源泉による学問的アイデンティティの形成は、無媒介に為されたのではない。人は、ある固有領域の分析、記録、表現、研究者に、現実の外的条件のもと、いかなる内的軌跡をたどって到達するのか？ 彼は、晩年、フィスク大学で秘書に口述筆記してもらった「自伝的ノート」（“An Autobiographical Note”）の冒頭を、次のように書き出している。「私の社会学への関心は、ゲーテの『ファウスト』を読んだ時に遡及できる。周知のように、ファウストは書物に倦み、世界——人々の世界を視たいと望んだ。（中略）私は記者になり、多くの世界、記者の接する種の世界を視た」⁽²⁹⁾（Park〔1950：V〕）。

彼は、博士論文に取り組んでいた時期については、次のように回想している。「この時までには、私はアカデミックな世界に病み疲れ、人々の世界に戻ることを望んだ。しかし、私は、ファウストの読書から学んだ、人間的性質（human nature）に広く精通することへの志しを決してあきらめなかった」（Park〔1950：VI〕）。パークはなぜ病み疲れたのか？ 1927年、パークがL. バーナード（L. Bernerd）の調査に対し書き残した記録から、ハーバード大での助手時代の転機をもう少し詳しく知ることができる。「完成したのは、薄い小さな書物で読みにくいものだった。私

「最高の教師は、少なくとも最高の大学教師は、ストラスブルク大学で学んだ G.F. クナップだった。(中略) 彼のおかげで、私はドイツ農民を知り理解することができた」(Park[1941: 37])。

1903年、ハイデルベルク大学教授に就任した W. ヴィンデルバントの後を追って、パークは同大へ移った。前者からの方法論的影響の大きさについて、パークは次のように述べている。「ジンメルの講義を除いて、私は社会学の体系的指導を受けたことがなかった。社会と人間的性質をめぐる私の知識の多くは、私自らの観察から得られたものである。しかし、ミシガン大学、後にハーバード、ベルリン大学で学んだ後、最後に、ストラスブルク、ハイデルベルク大学で、ヴィンデルバントの指導下、哲学の徹底した訓練を受けなかったならば、私の観察はほとんど役に立たなかっただろう」(Park[1973: 257])。パークにとり、〈観察〉が社会学的経験の基底にあったが、観察内容の方向付け、分析、解釈、定式化のために、大学での思考実験の訓練、方法論的訓練は不可欠だったのである。

1903年秋、パークは、ボストンに帰った。それから、2年間、ハーバード大学で哲学助手を務めながら、大半の時間を博士論文の準備にあて、ハイデルベルク大学哲学部に、博士論文「群集と公衆」(“Masse und Publikum, Eine Methodologische und Sociologische Untersuchung”)を提出。この論文に関し、パークは生前に不満を表明していたが、今日、再評価の動きがみられる。そのころ、パーク一家は、クウィンシー (Quincy) に住んでいた。折しも、コンゴでのベルギーの圧政への反対運動が、アメリカでは同地で始まった。パークは、集合心理学のアメリカでの見通しに深く失望し、するべきことが見つからないというアイデンティティ危機に陥りかけていた。「私は、再び、新聞人になるか、あるいは別の文筆活動をしようと考えた。コンゴ改革協会が機会を与えてくれた」(Park[1973: 257])。

次に、以上の初期生活史の巨視的史的背景について簡単に概観しておこう。

Ⅶ 初期生活史の史的背景

南北戦争後、20世紀に向けて、アメリカは、急速な工業化、都市化、海外進出をとげていった。アメリカが世界の政治、経済、文化面で世界を主導してゆく大国の力を培い、次第に顕在化させていった時代を、初期パークの生活史は歴史的背景としている。他方、世界の希望だったアメリカが、労働者、農民の貧困に顕在化された「ヨーロッパ並み」の現実に転落してゆく史的過程でもあった(清水[1969: 247-267])。南北戦争後の25年間に、アメリカは農業国から世界第一位の工業国へと転換をとげた。その要因として、石油などの天然資源、肥沃で広大な土地に恵まれた地理的条件に加え、通信技術、交通の発展などがあげられる(進藤[1982: 14-31])。さらに、工業化に必要な大量の労働人口の増加を支えたのは、移民と、農業から転じた黒人労働力だった。アメリカへの移民総数は、1880年までは約1,002万人弱だったが、1881年から数次の移民制限法が成立した1920年代末までの総数は約2,757万人強と急増した。この間、1870年代から80年代にかけ、北欧などからの新移民が急増した(岩野[1982: 91-128]・Bogue[1959: 348-374])。新移民にとり、すでに「フロンティア・ライン」が消滅し、都市での激しい生存競争が待ち受けていたアメリカは、決して容易な地ではなかった。

に耳を傾けた」(Park[1941:39])。

パークの社会学的発想の基底を形成したものとして、ミシガン大学での J. デューイ、さらにジェームズらハーバード大学の研究者との出遇いから、思弁のみの観念的営みとは異なる、経験、実験、調査をめぐる諸方法の価値への開眼があげられよう。「デューイとジェームズはプラグマティストだった。私が彼らから学んだものは、物理科学と同様、社会的問題における教育方法としての、スコラ哲学に対立する、経験、実験、調査の価値であった」(Park[1941:40])。

1899年、パークは、ハーバード大学大学院で修士号を取得した。いぜん、父から経済援助を受け、パークは家族と共にベルリンへ渡った。妻と3人の子供、E. カヒール (E. Cahill)、T. ワーナー (T. Warner)、M. ルーシー (M. Lucy) も一緒だった。同年秋、パークは、ベルリン大学で履修登録した (Park[1973:255])。半学期のみ、彼は、新カント派の道德哲学者 F. パウルゼン (F. Paulsen) と、G. ジンメル (G. Simmel) の講義に出席した。この時、ジンメルは41歳。パークにとって、ジンメルの講義が唯一の、学生として社会学教育を受ける機会となった。パークは、ニュースを、社会的相互作用の理論枠組の中に位置付けることをめざした。心的相互作用説を洗練させたジンメルは、パークの社会学的理論枠組形成に、重要な影響を及ぼしている。ドイツ留学中、パークは、A. コント、H. スペンサーらの社会学の古典的著作から多くを摂取した。社会学のヨーロッパ的伝統は、個人よりも、集団に集中し、全体としての社会秩序と紐帯の保持に焦点が向けられていた。パークは、社会有機体論者から、マクロ社会学的視点を学んだが、この中心的伝統の外縁にいたジンメルからは、「異邦人」の概念の継承など、方法論的にもっとも大きな触発を受けた (Matthews[1977:41])・折原[1969:52-67])。

一方、パークは、ベルリンで、ロシア人、B.A. Kistiakovski の書いた社会科学方法論に関する論文と出遇い、後者が、新カント派の W. ヴィンデルバント (W. Windelband) の教えを受けたことを知った。1900年、パークは、ヴィンデルバントから社会科学方法論を学ぶため、ストラスブルク大学へ移った。パークは、ヴィンデルバントと、西南ドイツ学派の完成者、H. リッケルト (H. Rickert) から、社会学を含む科学の法則定立的領域と、歴史学に代表される特殊個別的 (ideographic) 領域の分節化に関する基本的認識を継承した⁽²⁶⁾。後年、パークが、社会学の特性に関し、「社会学は自然科学を踏襲し、時空に拘束されない、人間性と社会についての科学的一般化をめざす。社会学者は、経験を概念的知識に再構造化する」(Park[1921])と述べたのは、ヴィンデルバント⁽²⁷⁾からの影響が色濃くうかがわれる。

方法論的研究だけではなく、人々の生活の具体的リアリティーに限りない関心を示し、その中に分け入ってゆくパークの優れた資質は滞独中にも発揮されている。ストラスブルク大学で、彼は、名目主義貨幣論体系の構築で有名な統計、経済学者 G.F. クナップ (G.F. Knapp) から、ドイツ農民の生活様式をめぐる多くを学び、農村地帯を旅した。ドイツ農民との触れ合いは、帰国後のアメリカ南部での黒人運動への参加、シカゴ大学での移民調査に導入した比較研究方法論への重要な手掛かりをもたらした。東部ヨーロッパ農民が気どりのない率直な人間性であったことは、パークの心を打った。帰国後、黒人運動に参加することに躊躇しなかった一因として、この時の経験があげられる (Park[1941:37])。デューイ、ジェームズらからの影響と接続するが、クナップは、パークの人間洞察へのヒューマニスティックな視点形成に影響を及ぼしている。

ヒール (C. Cahill) と出会う。二人で、フランス革命、ロシア・ニヒリズムなどの本を読み合った。求婚を一契機に、パークは将来の不安を感じる新聞人生活に幻滅し、彼女も望まなかった。1894年、結婚。パークは、1897年から1898年まで、『シカゴ・ジャーナル』(Chicago Journal) の劇評担当、記者として、最後の新聞記者生活を送った。夢を抱いていたニューヨークの新聞界に失望したところからの、パークの内面の揺れ動きは複雑だった。資本主義の発達が急速で社会的競争が苛烈な中、パークは、働く大衆の生と自然を歌った W. ホイットマンの詩集『草の葉』を愛した。ツルゲーネフ、トルストイが、ロシアの農民に深い共感を抱いたように、民衆 (the people) への同一化に心を惹かれた。同時に、H. イプセンの思想から影響を受け、偽善と強制を追放した誠実な社会の創造をめざしたアナキストたちへの共感もみられたのである。

1898年、パークは『シカゴ・ジャーナル』を退社した。彼は、妻に十分な生活の安定を与えられず、また新聞の仕事は社会的にも知的にも死んだ目標にみえた点で、新聞記者の仕事に二重に不満だった。研究生活のため、父が経済援助を申し出たため、パークは、新聞とニュースの原理探究のため、哲学と心理学研究に戻ることを決意した⁽²⁵⁾ (Matthews[1977:31])。

VI-4 科学的認識への志向、視点更新、視野拡充期

パークは1898年、ハーバード大学大学院に入学した。同大学の哲学部門は、W. ジェームズ (W. James)、J. ロイス (J. Royce)、G. サンタヤナ (G. Santayana)、H. ミュンスターベルク (H. Münsterberg)、G.H. パルマー (G.H. Palmer) らがおり黄金時代だった。パークは、新聞を、第一に、社会学的現象の源泉として、第二に、客観的、包括的に制度として定式化するための方法論的研究をめざした (Park[1973:255])。

彼は、とくに W. ジェームズから、科学的研究のもたらす視点更新の愉しさ、人間存在への共感、個性への民主主義的尊重の意義を学んだ。「W. ジェームズは講義をしなかった。彼はただ語り合った。学生が学んだものは、テキストからではなく、ディスカッションからだった。(神の属性について、学生が議論していた時)、彼は『無限に古い』と助言した。その言葉がスコラ哲学を駆逐した。その時から、論理学、形式的知識への興味、それらが有していた権威が、私にはなくなった。観念はもはや、リアリティーと事象の世界の代用あるいは代理ではなくなった。かくして、私の関心は、哲学というよりも、科学におかれた」(Park[1941:38-39])。

ジェームズは、個人の内部のかけがえのない経験と、人それぞれの洞察力を重視していた。「ジェームズにとり、宇宙は閉じられたシステムではなかった。固有の経験をもつ諸個人は、他者が決して持ちえぬ世界への洞察を有する。現実の世界は、そこに生きる男や女たちの他ならぬ経験から構成されるのであり、それは、我々が知識と呼ぶ、省略された要約的記述の世界ではなかった」(Park[1973:255])。

ジェームズの、他者の心情を、相手の立場を尊重しつつ、理解しようとする姿勢は、パークの脳裏に生涯刻みこまれた。「ある時、異常心理学のセミナーで、ロード・アイランドのプロヴィデンスの精神病院を訪ねた。ジェームズは、患者たちの中に旧友を見つけた。この友は、いかに自らが星の運動を支配し、宇宙を管理しているかを語りながら、法悦状態で、付き添い人の手につかまりながら散歩していた。ジェームズは直ちに彼の手をとり、共感と真の関心を抱いて、話

注目される。その意味では、パークの内部では、記者生活の半ば前後から、〈事実の発見、暴露〉という、当時、支配的であったジャーナリストの中心的職務とは異なった、それを乗り越えてゆこうとする志向性が萌芽し、はぐくまれつつあったのではないか。これは、記者時代のパークに関する仮説的問題呈示である。

以上の問題点に関連した興味深いエピソードがある。有名なピッツバーグ調査報告書刊行（1909-1914）の数年後、パークは、彼が発想した「科学的報道」の概念は、大なり小なり、社会踏査法（social survey method）で遂行されたコミュニティ調査の観念に他ならなかったことを理解した、と回想している（Park〔1973：254〕）。パークは、社会踏査法などを知らない中で、探査報道を、一人の記者として、1890年前後に試みていたのである。

1892年、パークは、『ニューヨーク・ジャーナル』（New York Journal）の記者になった。Essex Market Court Houseの警察担当特ダネ記者となり、再び、阿片窟などの都市の暗黒街に潜入取材している。同時に、『ニューヨーク・ワールド』（New York World）の日曜紙にも、しばしば記事を書いた。パークは、雑踏の喧騒と孤独、大都会の多様な風景の中で彷徨することを心から愛した。ニューヨークの一日が始まろうとしている夜明けに、仕事を終えて、自宅まで歩くことを好んだという。彼の詩的一側面である。一方、後年の都市研究との関連をみると、パークはニューヨーク時代に、大規模な諸組織が相互依存関係の中で機能していることに視野を開いている（Matthews〔1977：9〕）。

しかし、パークは、ニューヨークでは一線記者として活躍できる期間が一般に短いことに失望、同地を離れることを決意した。1892年から、『デトロイト・トリビューン』（Detroit Tribune）の記者、次いで都市版編集者として活動し、次に『デトロイト・ニュース』（Detroit News）へ移った。

1892年、パークは、商業主義に奔走する新聞とは異なる知的、文化的新聞に取り組もうとし、新聞発行は実現しなかったものの、この事業の企画者、F. フォード（F. Ford）と師の J. デューイから、社会的コミュニケーションに関する大きな社会的触発を受けた。この年、パークは、J. デューイから、“知性の組織運動”のリーダーだったフォードを紹介された（Park〔1973：255〕）。パークは、フォードが、記者は表面で進行しているように見えるものよりも、実態記録に基づく長期的トレンドに関する認識が必要だと主張することに、関心を抱いた（Raushenbush〔1979：20-21〕）。フォードは、現在のできごとを哲学的に洞察し、ニュースの深層の意味の報道をめざす『思想ニュース』（Thought News）刊行を計画、デューイ、パークは協力することになった。フォードから、「芸術と生活の関係」の担当を依頼された時、パークは喜んで承諾した（同上）。しかし、経済的基盤が確立できず、同年4月、『思想ニュース』刊行の夢はあえなく挫折した。しかし、新聞記者生活の中で、固有の研究領域を発見できずにいたパークは、フォードから、新聞と世論に関するテーマを示唆された。やがて、それは博士論文に結実するのである。パークは、フォードを通じ、「現代社会においてコミュニケーションは不可欠な凝集力であり、ニュース全体の質的改善により全体社会の質を高めることができる」という認識を得た、と回想している（Matthews〔1977：29〕）。

一方、1892年、パークは、ミシガン高等裁判所判事 E. カヒールの長女、当時24歳の C. カ

問いの一部にしか応えてくれなかった。「私は、ファウストが語っているように、経験それ自らのために、私の魂に世界のすべての喜びと哀しみを集めるために生きようと決心した。その結果、私は新聞記者の道に進んだ。1887年から1898年まで、私は知的放浪の生活を送った」(Park [1973: 253])。1887年、パークはミシガン大学を卒業した。文献学、次いで哲学の優等学生友愛会会員 (Phi Beta Kappa) となった (Raushenbush [1979: 201])。

VI-3 米国都市での直接取材——内的彷徨期——

大学卒業後、パークは短期間、レッド・ウィングで高校教師をした後、新聞記者になった。その背景として、開かれた知の営み、社会的コミュニケーションの重要性を提唱していた J. デューイからの直接的影響があげられる。デューイは、書斎の仕事もさることながら、市井で真剣に生きる人々との友情を通じて、人間的滋養分を吸収しようとした哲学者だった (山田 [1966: 73])。

1887年、パークは『ミネアポリス・ジャーナル』(Minneapolis Journal) の駆け出し記者となり、3年間、在社した。初めは司法記者、次いで事件記者などを務めた。主に都市生活の多様な実態を取材し、記事を書いた (Park [1973: 254])。同紙の都市版編集者 B. ブラウンリー (B. Brownlee) は、ミシガン大学の学生新聞に、以前、編集者として参加しており、パークの先輩にあたった。彼は、パークが長文の特集記事 (feature news) 取材に適していると判断し、暗黒街の賭場、阿片窟 (opium den) などの取材に派遣した。こうした生々しい取材体験を、パークは昨日のこのように生き生きと回想している。「私は幸運にも阿片窟に潜りこんだ。私は、2～3服の恐ろしい麻薬を手にした。そこは、街の下層民たちでごったがえしていた。(中略)中にいた一人が、警官や記者たちを知っていたため、私はその場で追い出された。しかし、私はストーリーを得た」(Matthews [1977: 9])。パークは当時、社会学という言葉さえ知らなかったが、「このころ初めて社会学的関心を抱いた」と回想している (Park [1973: 254])。

一方、1890年ころ、パークは、アメリカの志しある新聞記者たちのメッカだったニューヨークの新聞社にあこがれていたが、一直線では移れなかった。『ミネアポリス・ジャーナル』に次いで、『デトロイト・トリビューン』(Detroit Tribune)、『デンバー・タイムズ』(Denver Times) の記者となった。アメリカでは伝統的に、多くの新聞社を経ながら、チャンスを求める記者が多いが、パークもその一人だった。

ミネアポリス、デトロイトなどの都市で、パークは、事実の発見、暴露という当時の通常のジャーナリストの仕事の域をこえ、今日言うところの探査報道を試みた。例えば、ジフテリアが都市に流行した時には、地図上に発点地点をプロットした。その作業を通じて、開放下水が感染源らしいことをつきとめ、調査結果を報道、読者の注目を集めたことがあった。パークは、この当時の経験をもとに、読者の興味に訴えるばかりの報道とは一線を画した「科学的報道」(scientific reporting) という概念を発想した。これは、売り上げ至上主義に狂奔する大衆新聞 (mass paper) の煽情主義的趨勢とは異質な、教育と社会改革のための新聞の可能性に接続する概念であった。パークが、人間的興味に訴える雑多なニュースの性質に関心をもちつつ、しかし、それに飽き足らなかったことは、1910年代に都市の社会調査研究に入っていた生活史的背景として

シガン大学に進んだ (Matthews[1977: 4-6])。

VI-2 知的世界への開眼——ミシガン大学在学期のパーク——

1883年、ミシガン大学入学。⁽²²⁾ 同大学は、アメリカでヘーゲル主義の旗を掲げた G.S. モリス (G.S. Morris) が1881年、哲学部教授に就任したことが契機になり、自由かつ清新な哲学教育を展開していた (Dykhuisen[1962: 513-544], 山田[1966: 55])。

パークの知的開眼における第一の重要な他者として、ドイツ語の青年教師、C. トーマス (C. Thomas) があげられる。パークは、彼から、ゲーテの『ファウスト』を学び、言語表現の可能性、文学的世界の広さに開眼した。次にみるパークの回想は、この師との出遇いが、いかに彼を学びに向けて鼓舞したかを物語っている。

「C. トーマスは、私が初めて出遇った真の学者だった。私は、彼から、ドイツ語よりもっと多くのものを学んだ。一年生のドイツ語で、授業開始から10日程過ぎた時、小試験があった。彼は、私に100点満点で10点をつけ、答案用紙の末尾に『今の6倍がんばらなければパスさせない』と書いた。その注意書きが、私の人生を変えた。私はそれまで、フットボール・プレイヤーで、屋外で遊ぶことの好きな少年だった。私は学徒となり、深夜、灯油を燃やして学ぶようになった。(中略) 私が大学に入ったのは、もともと知的動機からではなく実践的なものだった。エンジニアになるつもりだったが、その代わりに、私は哲学徒になった。そして、世界と、人間が考え行なったことについて、むさぼるような好奇心を抱くようになった」(Park[1941: 37])。

C. トーマスから強烈な知的啓発を受けつつ、パークの勉学の中心は哲学だった。パークは、計10コース選択したうち6コースまでが、就任間もない青年哲学者 J. デューイ (J. Dewey) 担当の哲学、心理学の講義であった。講義題目は、「形式論理学」、「経験心理学」、「思弁心理学」、「カントの『純粹理性批判』研究」、「プラトンの『共和国』のセミナー」、「H. スペンサーの哲学」と多岐に及んでいる。これらの講義を通じ、パークは、デューイの「知識と社会」、「理論と実践」を相互往来させた思想の信奉者となった (Matthews[1977], 山田[1966: 30])。パークは、デューイから受けた影響について、「デューイと一緒にいると、学ぶことは常に冒険に思われた; 私たちを、安全で証明された知識の境界をこえて、問題提起的プロブレマティックで未知の領域へと旅立たせる冒険だった」(Park[1941: 39]) と回想している。⁽²³⁾⁽²⁴⁾

ミシガン大学で、パークは、C. トーマスと J. デューイの二人の師から、文学と哲学が、自己と日常生活をより広い視角から理解する道に通じていることを学んだ。一方、パークは、勉強のみに打ちこんでいたのではなく、学生新聞『ミシガン・アルゴノウト』(The Michigan Argonaut) の創刊メンバーの一人となり、活発に活動した。同紙は、先発紙『クロニクル』(The Chronicle) のライバル紙だったため、言論戦にも参加したという。

パークは在学中、実践的目的なしに、世界を観察し、認識することにのみ、自己を専心させる生活を構想したときがあった。それは、事業拡大に情熱を注ぐ、父の生きるビジネスの世界とは異なる知的探索の生活だった。彼が、新聞記者、黒人運動への参加を経ながら、社会科学への志向を培っていった一原点として、ミシガン大学での知的開眼体験が存在していたのである。

しかし、パークが初めて体験したミシガン大学での知的探究の生活は、彼のスケールの大きな

〈後期パークの生活史〉—W.I. トーマスの勧めが契機となり、パークが1913年、シカゴ大学で初の講演「黒人に関する人種同化」(“Racial Assimilation in Reference to the Negro”)を行って以降、同大学、後にフィクス大学(Fisk University)などで、社会学の研究、教育に専心していった時期である。この間、1923-25年には、「太平洋沿岸人種関係調査」(the Pacific Coast Race Relations Survey)のリーダーとして、多くの生活史調査の調査票を考案し、日記、手紙調査と共に、面接調査を奨励するなど、数多くの社会調査の牽引役を果たした(Plummer[1983:42])。

以上の年代区分をもとに、次に、初期パークの生活史を跡づけてみたい。そこでの基本的関心は、パークにおける社会学的視点の発生、形成過程、生活史の潜在的可能性(potentiality)とその具体的実現のされ方を跡づけることにある。

VI 初期パークの生活史

VI-1 野に遊んだ少年期

パークは、1864年2月14日、アメリカのペンシルバニア州ルゼルネ(Luzerne)郡のハーヴェイヴィル(Harveyville)に生まれた。この年は奴隷解放宣言が発せられ、また南北戦争終結の前年だった。父が戦争から帰ったとき、一家は、パークの祖父母がミネソタのレッド・ウィング(Red Wing)に移居したため、共に移った(Matthews[1977:2-3])。祖父母は2人とも内科医師であった(Park[1973:251])⁽²¹⁾。父のハイラム・アサ・パーク(Hiram Asa Park)は誇りある西部人で、食料雑貨業(grocery)を営み、母のセオドシア・パーク(Theodosia Park)は小説などの読書好きであった。レッド・ウィングは元来、ニューイングランドから来た人々が定住していたが、南北戦争後、北欧からの移民が移住してきた。このため、レッド・ウィングは、スウェーデン、ノルウェーからの移民などの外国人コミュニティの中心となった。こうした地理的条件のもと、パークは、スウェーデン、ノルウェーからの移民と親しく交わった。パークは、夏、川から流木を集め、冬になると、橇で持ち帰った。友人と、付近の川や湖を古いボートで横断して遊ぶなど、ミシシッピ川流域の大草原に囲まれた町で、のびのびとした少年時代を送った(Park[1973:251-253])。

一方、アマチュア新聞『あてなき彷徨者』(Rambler)を発行、後年の表現行為への芽生えもみられる(同上)。パークは、娯楽小説などから得た読書能力を除くと、大学入学まで、知的関心は稀薄で、「大学に入るまで、私の教育は始まらなかった」と回想している。また、大学入学前、パークは、ヒロイックな鉱山技師を描いた本に魅せられ、数ヶ月間、鉱山調査隊に参加、技師の道をめざした。1881年、レッド・ウィング・ミネソタ高校(Red Wing Minnesota High School)を卒業し、ミネソタ大学の科学課程(one-year science course)に通学した(Raushenbush[1979:201])。しかし、基礎知識の不足を痛感、修学は困難なことを知った。

パークと父との関係は複雑であった。幼年期、一家の生計は豊かでなかったが、父は努力を重ね、実業家として成功した。しかし、パークは、父の事業への野心になじめなかった。ミネソタ大学時代、父は、パークが家業に入ることを望んだ。彼はそれに従わず、兄の勧めもあって、ミ

(Bulmer[1984])。このため、同学派をできる限り、開かれた多方向性をもった集合体として捉えようとする視座が求められる(Deleuze & Guattari[1980])。

社会学研究者の生き方には、多様な道筋が開かれているだろう。史的背景、社会学の形成段階による被規定性はあるものの、青年期前後から一貫して社会学徒として生き、早期に研究テーマを見出す人は少なくない。このタイプとは対極的に、パークは、学問的アイデンティティを、重要な他者たちとの出遇いを通じて、じょじょに形成していった。その意味で、彼の生き方の解明のためには、準拠関係性(reference-relationship)の形成と変容について考えてみるのが有効な一方法であろう。パークは、人生の初期から大学生時代、新聞発行に参加し、卒業と同時にジャーナリストになるなど行動力に富むと同時に哲学に親しみ、文学を愛するなど、内省的気質も強かった。こうした両義的な気質をもちつつ、パークは、青年期から知的関心が強く、30歳代での大学院入学、ドイツ留学を契機に、オープン・トゥー・オールと言っても誇大ではない程に、哲学、文学、歴史、社会思想、人類学、犯罪学、地理学、新聞とニュース研究、集合行動、生物学など、広範な知的探索を続けた。本研究では、これらの彼の知的旅路に一つの焦点をあてる。

しかし、筆者の真のねらいは、「パークという人は、どんな人間であって、どんな生き方をしたのか」という全体像の再現と、その生き方の意味の解明にある。おそらく、知識人と言われる多くの人について仮定的に言えることだが、パークも知的領域のみに生きた訳ではない。〈知的志向〉と〈日常生活〉がいかなる関係にあったのか？⁽¹⁹⁾彼の研究活動を背後で支えた人々の存在にも光をあてたい。

V パークの生涯とその転換点——生活史の分節化——

ここでは、パークの生涯とその転換点(turning points)に関し、次のように分節化を試みたくうえで、初期生活史の再現化を行う。

〈初期パークの生活史〉——年代区分として、本稿では、1864年のパークの誕生から、1905年、ハーバード大学で哲学の助手を務めながら、博士論文をまとめた時期までを設定し、さらに、この時期を一期から四期までに再分節化したい。初期パークの第一期は、1864年の誕生から、1883年、ミネソタ大学に学んだ時期までである。第二期は、1883年から1887年まで、ミシガン大学に学び、知的世界に開眼していった時期である。思想的には、自由主義に目醒めた時期であった。第三期は、1887年から1898年まで、アメリカの都市ジャーナリズムの一線で働いていた時期である。第四期は、1898年、ハーバード大学大学院に入学してから、博士論文をまとめ終えた時期までである。同期は、哲学的、社会科学的認識への志向を深めると同時に、視点更新、視野拡充に努めた時期だった。

初期から中期への移行過程には、視点の設定にもよるが、不連続性とも言うべき断層がうかがわれる。博士号取得後、パークは身を一転した。⁽²⁰⁾

〈中期パークの生活史〉—1905年から1912年まで、アメリカ南部のタスキギー(Tuskegee)で、黒人運動家B.T.ワシントン(B.T. Washington)のスポークスマンないしは秘書的役割を務めていた時期である。

現したことがある。

「パークの魅力は、単なる象牙の塔の中の学者ではなく、人々の悲喜こもごもが交錯し、様々な事件が発生する〈現実〉と〈学問的世界〉を往来した人生を送ったことだ。パークの生涯は、ジャーナリスト、社会運動、研究者と仕事こそ変わったが、根本的には、社会と人間の関係、社会的矛盾を問い続けた点に、後年のシカゴ学派形成の秘密の一端があるのではないか。〈問いかけ〉とは、洞察、予見、懐疑、探究心、批判的精神、省察などの内的運動の総称である。もともと何も問おうとしない人、人生途中で問うことを放棄した人々が多くなることは、現代文化と人間の危機と仮定視するとき、パークから学ぶことは多い」(渡辺[1980 b])。

以上はあくまで一仮説の呈示であったが、翻身研究を通じて、筆者は、パークの生涯における志向性、学問的アイデンティティ探索の道筋、シカゴ学派における準拠他者 (reference others) 問題の解明を課題とするに到った。そうした中で生じたのが、次の問いである。

「実践力にすぐれ、たくましい研究者という後期のプロフィールの一面とはちがった、こころの揺れ動き、苦しみが、初期、中期のパークの生活史にはうかがうことができる。その深い自己への虚無感をいかにしてしずめて、道を切り拓いたのだろうか」(渡辺[1984 b : 6])。

多様な社会学的知の相互刺激性を最大限、重視しつつ⁽¹⁴⁾、さしあたり、筆者は、「自分が自分らしく生きる」ことの意味＝自己アイデンティティ問題と社会学研究との接続を企図している。そのためには、抽象的で漠たるイメージが伴いがちの〈社会〉という像を、具体的リアリティー＝我々にとって血の通ったものとして捉え返すため、一度、個人的関心にひきつけて考えてみたい⁽¹⁵⁾。

次に、パークの生活史研究に関する方法論的検討を行う。

IV パークの内的生活史研究に関する方法論的検討

本稿では、第一に、パークと対面的相互作用 (face-to-face interaction) が営まれた人間群像とその生き方に焦点をあてる。第二には、パークが読書などで強く触発された、対面的関係ではないが、内面的に重要な影響を受けたと、文献実証上、仮説設定が可能な、歴史上、あるいは芸術分野などでの想像上の重要な他者 (imaginary significant others) に焦点をあてながら、パークの初期生活史の特質を跡づける。これらの段階的作業を通じて、重要な他者たちとの相互作用を通じたパークの〈生〉の変遷⁽¹⁶⁾を跡づけ、それを媒介として、初期シカゴ学派の全体像に切りこんでいくことが、当面のねらいである。

初期シカゴ学派は、理論枠組の形成、経験的調査研究、さらに政策科学的側面のいずれをみても、広範な対象領域を設定すると同時に、観察を体系的に有効化する方法論探索のため、異領域からの不断の摂取を志向した。さらに、世間ずれしていない (unsophisticated) 生き方を愛したパークをはじめ、個性豊かな社会学徒たちが担い手となった (Matthews[1977])。シカゴ学派は、その特質を簡潔に要約することは極めて困難な、複雑なベクトルを内包している。⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾ H. クリックは、「シカゴ学派が一枚岩的実在 (monolithic entity) であったとみるのは偽りの仮定である。進化モデルをめぐるっては、様々な解釈者の集合であった」(Kuklick[1980 : 825]) という解釈を示している。調査方法に関しても、数量的方法の導入がみられるなど一義的ではない

[1984：87-88])。

現在の社会調査の多くは、調査目的を明確化したうえで、調査方法、人員、資金などを合目的的に組み合わせるという意味で、目的合理的特性が強い。「調査以前」に、問題意識、方法論、調査対象の設定の妥当性について検討を加え、背後仮説、作業仮説を分節化したうえで、手順を詰める合目的のプロセスは、調査の拡散を防ぎ、主題の明晰化のためにも不可欠と言えよう。一連のプロセスの精密化は実証主義的社会調査研究の精度を高め、科学性を高めることに寄与することを確認したうえで、あえて次の問題呈示をしよう。「調査以前」、「調査の実施」、「調査結果の記録、分析」、さらに「調査報告を終え、一連の調査研究がすべて終わったとみなされた後」の各段階間の連関をみると、不連続性、矛盾、飛躍など、目的合理的には理解し難いケースが少なからずあるのではないかと。近代合理主義的文脈における〈知〉は、自らが仮構した解釈枠組からこぼれ落ちるものは、了解可能レベルの対象外として切り棄てる傾向が色濃く、社会調査もまた例外をまぬがれないのではないかと。

第二に、20世紀の、資本主義的企業化を進めたジャーナリズムでは、自然科学的事実信仰に根ざす客観報道の神話とでも呼ぶべきものが広く流布していた。しかし、1960年代以後、この神話に挑む形で、探査報道 (investigative reporting)、深層報道 (depth reporting) が衝撃的に出現した。これらは、ジャーナリストが報道におけるリアリティーの捉え方の価値転換をめざすと同時に、内面世界に根ざして、等身大の視角から現代を取材したいと希求する過程から顕在化してきた⁽¹²⁾(斎藤[1970]、香内[1980：44-47]、渡辺[1982：74-85])。

第三に、翻身 (alternation) の理論的実証的研究で、筆者は、個人が重要な他者 (significant others) との出会いなどを契機とした内面的変容により、例えば「自分が自分らしく生きたい」と、自己アイデンティティの発見、人生の目標への接近を企図し、あるいは無自覚的、半自覚的、ないしは自覚的に転向するなどの生き方の変更に焦点をあてている⁽¹³⁾(渡辺[1984：64-77])。

以上の三点は、①生きられた世界に分け入ってリアリティーを深くからすくいあげる作業、②我々の生き方に具体的インパクトを及ぼす視点更新に通ずる知—という二文脈で、全体的には現代の社会学的知のあり方を問う背後仮説として相互接続している。斎藤([1981：3])は、探査報道におけるジャーナリストの仕事を、「取材を通じて少しずつ、それまでわからなかった自分を発見し、自分が変わる『自己変革の旅』だと位置づけている。従来の主—客図式は、調査主体が調査対象者と相互作用を営み、対象者からも働きかけられ、自己の状況定義の修正、自己変容をとげる可能性があることへの視点が不明確ないしは欠落していなかったか。筆者は本研究を通じ、これまでの実証主義社会学からの批判的撰取と、実証主義とは異なる社会学的想像力などの位相からの接近という両面作戦を企図している。次に、本研究への基本的問題関心が、翻身研究から、いかにして紡ぎ出されたかを述べよう。

Ⅲ パークの志向性への問い——翻身論からの接続——

翻身研究に自覚的に着手する以前に、筆者は、ジャーナリストを経て、社会学研究を志向した点で、筆者の個人的経験とも重なるパークの内的生き方に強い共感と関心を抱き、次のように表

(social survey)、社会調査(social research)の一源泉としての初期シカゴ学派の検討である⁽⁶⁾。多くのヒューマン・ドキュメント、モノグラフの方法論的検討と共に、指導にあたったパークの、いわばパロール(parole)を再現化する中から、今日的意義と問題性を洗い出したい。第二は、調査対象を外在的に客観的对象として捉える狭義の実証科学的方法の問題性と、限界克服の方途の探究である。第三は、1910-30年代に発表された研究報告、論文、著作の内在的分析から接近するのみならず、パークをはじめとする初期シカゴ学派を担った人々の実人生、内的生き方の意味を跡づけ、それと研究プロセスを複眼的に探索したい⁽⁷⁾。テキスト中心主義とは異なるアプローチにより、シカゴ学派に血を通わせてみようとする企図である。第四は、パークが、科学の理性知を重視しつつ、共感(compassion)や感情移入(empathy)などの社会学的想像力=感性知の位相の重要性を訴えたことの意味の検討である。第五に、多様な仕事を遍歴しながら、世界を旅し、多くの都市を歩き回ったパークという開かれた〈生〉と〈学〉を志向した人間存在一彼の生涯では実現できなかった彼の夢、可能態を含め—の意味解明を通じ、シカゴ学派の全体像に迫り、同学派を開く作業を積み重ねたい⁽⁸⁾。

以上の目的に段階的接近を図るが、本研究の背後仮説は次に述べるように、オープン・エンドに近い。パークらの内的生き方を跡づけ、再考する過程から、何が視え、何が新たに課題になってくるのかは、それ自体が興味深い《社会学的旅路》だと思われる。

Ⅱ 社会調査と〈生〉への視点更新——背後仮説の検討

本稿の背後仮説は、第一に社会学と社会調査のパラダイム論争から、第二は、筆者の個人的経験とも重なる、20世紀のジャーナリズムの神話の崩壊過程から、第三は筆者が取り組んできた翻身論研究から形成された。これらの分節化は立論の便宜上からであり、問題はすべて接続している。

第一に、現在、〈近代〉固有の知の行き詰まり、硬直化現象の中、新たなパラダイムが模索されている。その最大の発端は、「私は思惟する、故に私は在る」と主我論に拠ったデカルトに代表される、近代に特異な認識的前提=厳密な主-客図式の貫徹への批判であった(江原[1983: 108-119])。1960年代以降、現象学的社会学、シンボリック相互作用論、解放知と統御知の問題、生活史研究法、具体性の社会学、社会学的想像力⁽⁹⁾の復権への志向などが出現してきた背景には、主-客図式では今から未来への方向性が視えてこない今日のカオスの状況と〈生〉があったからではないか。人々の喜びや哀しみに根ざす〈生きられた経験〉を、あるいは人間の状況変革能力を、実証主義的主-客図式はいかにしてすくいあげることができるのか?この根源的問いに対し、現象学は、生の体験を、それ自らの内面的パースペクティヴから捉えようとし、一方、シンボリック相互作用論は、人間が状況に主体的反応を行いうる内的機制を備えていることを理論化してきた⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾(湯浅[1982: 58], 渡辺[1983: 58-68])。だが、これらの抽象度を高めた理論的成果を、社会調査などの具体的営みの場に還元する作業は必ずしも活発ではない。生活における抜き差しならぬものとして迫ってくる経験、現実肉迫する中で生々しい感動を伴う知識を得る方法を、社会学と社会調査において具体化するためには、いかにあるべきなのか(江原[1978: 34], 中野

[1975:103-104], Faris[1967:11-12])。しかし、彼の基本的発想は、1910年代以降の初期シカゴ学派に接続している⁽²⁾。その点について跡づけておこう。スモールは、当時の歴史学、政治経済学を批判的にみていた。歴史家は、社会的関心事をめぐる経験的研究や、現実に進行中のできごとの解釈を助ける一般法則の帰納にほとんど興味を喪失していた。政治経済学は、アダム・スミスの全域的関心を喪失し、単なる技術的ディシプリンに墮していた。スモールは、H. スペンサー、A. コント、L. ウォードに学びつつ、アダム・スミスが構想した社会諸関係の全体性の研究というテーマを、社会学は真に継承すべきであるという結論に達した。彼が学部長に就任以後、1925年に退任するまでの間に、アメリカの社会も大学も大きく変容をとげた。農村、小規模の町々の集合体から、産業勢力の集中、コミュニケーション・ネットワークの増大を伴った都市国家 (urban nation) へと転換したのである。(Payne, G. et al.[1981:98-99])。専門職、管理、技術階層主体の新たな中間階級が勃興し、アメリカ資本主義に自由かつ人間味ある特性を付加した (Carey[1975:9-39])。大学の社会的機能は、道徳的価値の運び手としての大学から、専門人たちの集合体へと変換し、シカゴ大学はその代表的存在だった。

スモールによると、社会学とは第一に、観察と帰納的方法に立脚する経験的ディシプリンであった (Small & Vincent[1894:15])。彼は学部長の仕事に多忙で、自ら調査に着手することは困難だった。しかし、シカゴ学派が理論の経験的検証に対し開放的であるのは、スモールの発想にまで遡及できよう。彼の教え子には、都市、新中産階級出身の者が増大し、リベラルな政治的信念を特徴としていた。初期シカゴ学派の古典的研究を産み出した人々は多様であったが、その中にはこれらの野心ある新しいタイプのアメリカ人たちが参加していた (Carey[1975:41-53])。

パークは、新聞記者、研究生生活、黒人の教育、社会運動への参加という特異な道筋を経て、1913年、49歳の時、初めてシカゴ大学の学期講師 (semester lecturer) となった。彼は、社会調査の基礎として、直接的経験 (direct experience) を重視した。「パークは、表面的知識と、現象の深部への精通とを明確に区別していた。このことが、シカゴ学派における最大の突破力の一つとなった。阿片中毒者の研究を試みる時には、阿片窟に出かけ、少しばかりの阿片を吸ってみさえした。彼らは、ギャング、渡り労働者 (hobos) のところへ出かけ、一緒に暮した」(Carey[1975:155])。

当時、社会学の聖書、あるいは表紙の色から緑の聖書とまで呼ばれた有名な教科書『社会学という科学入門』で、この方法論はより明示的である。「社会学徒が学ぶべき第一のことは、観察し記録することである。読み、次いで選択し、読みの結実であるマテリアルを記録すること、要するに、彼ら自らの経験を組織化し活用することである」(Park & Burgess[1921:V-VI])。

W.G. サムナー (W.G. Sumner) らのアメリカ社会学の第一世代⁽³⁾は、巨視的一般理論の形成をめざした。彼らの研究スタイルをあえて〈書斎の社会学〉(Armchair Sociology) と呼ぶならば、第二世代の初期シカゴ学派⁽⁴⁾は、思索だけではなく、大学の外の街に研究領域を発見した⁽⁵⁾。人々が泣いたり笑ったりしながら生きる現実のただ中から、社会学的発想を紡ぎ出そうとした点に、一つの現代的意義があるのではないか。

以上の簡単な概観を踏まえ、本研究の究極目的を展望しておこう。第一は、質的な社会踏査

R.E. パークの初期内的生活史と 初期シカゴ学派の基礎的検討

渡 辺 牧

開かれた血の通った社会学が待望されて久しいが、その道筋は今日まで茨の連続だった。1960年代以後、これまでの実証主義再考を含め、社会学の新たなパラダイム模索が続けられる中、社会学を閉ざされた営みとするのではなく、大学の内外との生きられた応答を深め、国際的視野から生活の世界に開かれた営みとしてゆく視座と具体的方法が強く求められている。こうした背景には、自由主義を内在原理とする日本社会の理念レベルでのダイナミズムを、いかにして実質化、具体化し、我々の〈生〉の多様な潜在的可能性を実現していくべきかに関する社会学的探索の動きが存在している。本研究の一課題は、自由主義社会のカオス的情況の中で、我々を生かしていく社会学的知＝生きられた知はどのような特性をもち、いかにして紡ぎ出されるのかという問題を、媒介的な戦略的迂回路として、R.E. パークと初期シカゴ学派の基礎的検討を通じて、探索することにある。

I 序——初期シカゴ学派研究の究極目的

1910年代から30年代にかけ、シカゴ大学社会学部を拠点に発展した初期シカゴ学派は、「具体的、帰納的、経験的社会調査」を重視しながら、大学の外に積極的に調査フィールドを求め、実際に調査研究を蓄積させていく社会学研究を志向した（Faris〔1967〕, Hinkle〔1980〕）。『ポーランド農民』研究で有名なW.I. トーマス（W.I. Thomas）¹¹⁾に接続しつつ、初期シカゴ学派の社会調査研究の実質的牽引者となり、調査計画の大枠を構想したのが、R.E. パーク（R.E. Park, 1864－1944）だった。パークは、人間が社会的に解放される過程と、情況への創造的働きかけの相関性を認識していた社会学者だった（Fisher & Strauss〔1978：13〕）。

1892年、シカゴ大学は世界初の社会学部を、A.W. スモール（A.W. Small）を学部長として開設した。彼の初期シカゴ学派の実質的展開への具体的影響は僅少だと言われている（Carey